

北陸地方の木目沈線文と遠賀川式土器について

久田 正弘

1. はじめに

木目沈線文とは、「薄い割板の端を土器の器面に押しつけて作った沈線紋」であり、遠賀川系土器製作技術の特色の1つ（佐原真1987）とされた。痕跡は木目に直行（a類：柱目板）と斜行（b類：板目板）があるという。ハケを用いているので、刷毛目沈線文（久々ほか1984）と呼ぶ例もある。佐原氏は北陸地方には富山県に2例と石川県に1例があり、富山県の2例は遠賀川式土器（佐原真1987）とされた。しかし、その2例は中期（小松式）に訂正（久々ほか1984）されたが、依然として遠賀川系土器との認識（久々ほか1984・東日本埋蔵文化財研究会1991）は残ったままである。90年代になり、類例が増加しており、その所属時期などを検討する必要がある、本稿を纏めた。

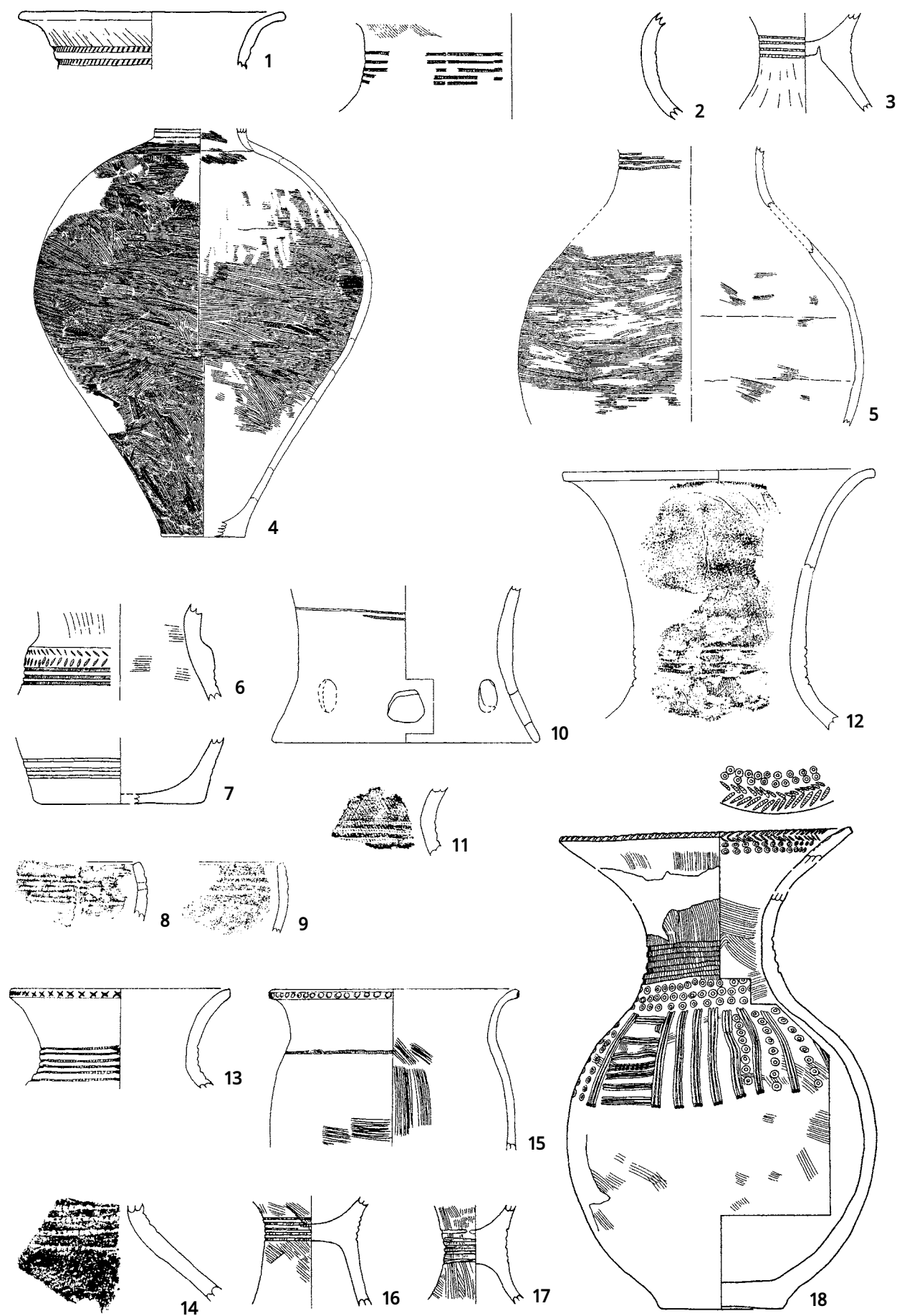
2. 石川県内の資料

加賀地方では5例確認され、南加賀地方には1例、北加賀地方では4例が確認された。第1図1は加賀市永町ガマノマカリ遺跡130号土坑出土であり、中期後半（凹線文出現以降）の土器と出土（山本ほか1987）した。壺の頸部に2条の木目沈線文（b類）を持つ。冬材の間隔は幅2～3mmと広く、この工具でハケ調整を行っている。2は金沢市専光寺養魚場遺跡SK06出土であり、凹線文を持つ壺と共に出土（増山1992）した。広頸壺の頸部に5条の刷毛目沈線文（a類か）を持つようである。3は金沢市二ツ屋遺跡河道出土であり、中期前葉と後半の土器が出土（松浦ほか1998）した。高坏と思われる、4条の木目沈線文（a類：限りなく柱目に近いもの）を持つ。受部にはソケットを充填しており、時期は中期後半である。4・5は金沢市西念・南新保遺跡出土である。4はK区SG01（土器溜り）出土（楠ほか1989）であり、SK14の10～20cm上面で検出された。中期後半であり、3本の凹線文を持つ甕と出土した。大型の壺であり、頸部に3条の木目沈線文（b類か）を持つようである。5は14号方形周溝墓の主体部の可能性があるSD09から出土（楠ほか1996）した。中期後半であり、壺の頸部に4条の木目沈線文（b類か）を持つようである。

能登地方では、6例が確認された。6・7は羽咋市吉崎・次場遺跡J・W区包含層出土（福島ほか1987）である。6は壺の頸部であり、幅広の突帯上に綾杉文を持ち、3条の木目沈線文（a類か）を持つようである。佐原氏が指摘された土器と思われるが、突帯の形状から見て、中期後半である。7は底部であり、観察表によると木目沈線文となっているが、定かではない。8・9は鹿島郡鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡A地区出土（栃木ほか1995）である。第12号竪穴式建物（8）第1号環濠N区（9）出土である。中期後半であり、同一個体の可能性が指摘されている。無頸壺か鉢と思われる、3条（a類か）持つようである。10は羽咋郡富来町八幡バケモンザカ遺跡SD06出土（松田ほか2000）である。凹線文系の台付鉢（在地）であり、2条（a類か）を持つ。11・12は富来町山王丸山遺跡包含層出土であり、中期前半～後半の土器が出土（的場ほか1994）した。共に壺の頸部に施文され、時期は中期後半と思われる。11は3条（b類）、12は5条（b類）を持つ。

3. 富山・新潟県内の資料

富山県内では4例が確認された。第1図13～15は中新川郡上市町正印新遺跡出土（酒井ほか1982）である。7・8層出土であり、前期の土器が少量出土し、中期の土器が主体であり、中期後半の土器が多く報告されている。13は遠賀川式土器とされ、木目沈線文（a類か、佐原1987）とされたが、口



第1図 木目沈線文集成

縁部と頸部の文様は貝殻腹縁（酒井ほか1982）という。14は壺の肩部破片であるが、櫛状工具による刺突文か木目沈線文（a類か）なのか記述がない。15は頸部に木目沈線文（b類か）を持つ甕と思われる。共に中期後半の可能性が高いと思われる。16・17は中小泉遺跡 SD33出土であり、遠賀川式土器（酒井・狩野ほか1982）とされた。共に高坏であり、16は木目沈線文（a類か）、17はヘラ描き沈線文を持つという。SD33は中期後半の土器が出土した。

新潟県内では、1例が確認された。18は佐渡郡新穂村平田遺跡 SD08出土である（坂上ほか2000）。上層で検出され、河原口式と栗林式が出土した。壺であり、頸部に4条の木目沈線文（a類か）を持つようである。時期は中期後半である。

4．北陸地方の木目沈線文の特徴

福井県内では、まだ確認していないが、調査などが少ないことに起因していると思われる。以下、北陸地方の木目沈線文の特徴をあげる。

特徴1：中期後半の土器群と伴う。前期・中期前葉の土器群と共に出土する例もあるが、遺構出土例は全て中期後半の土器と共伴した。

特徴2：壺の頸部に数条を持つものが多い。

特徴3：出土例は少ないが、貯蔵・煮沸・供膳形態に認められるから、その技法は特異な技法では無いようである。

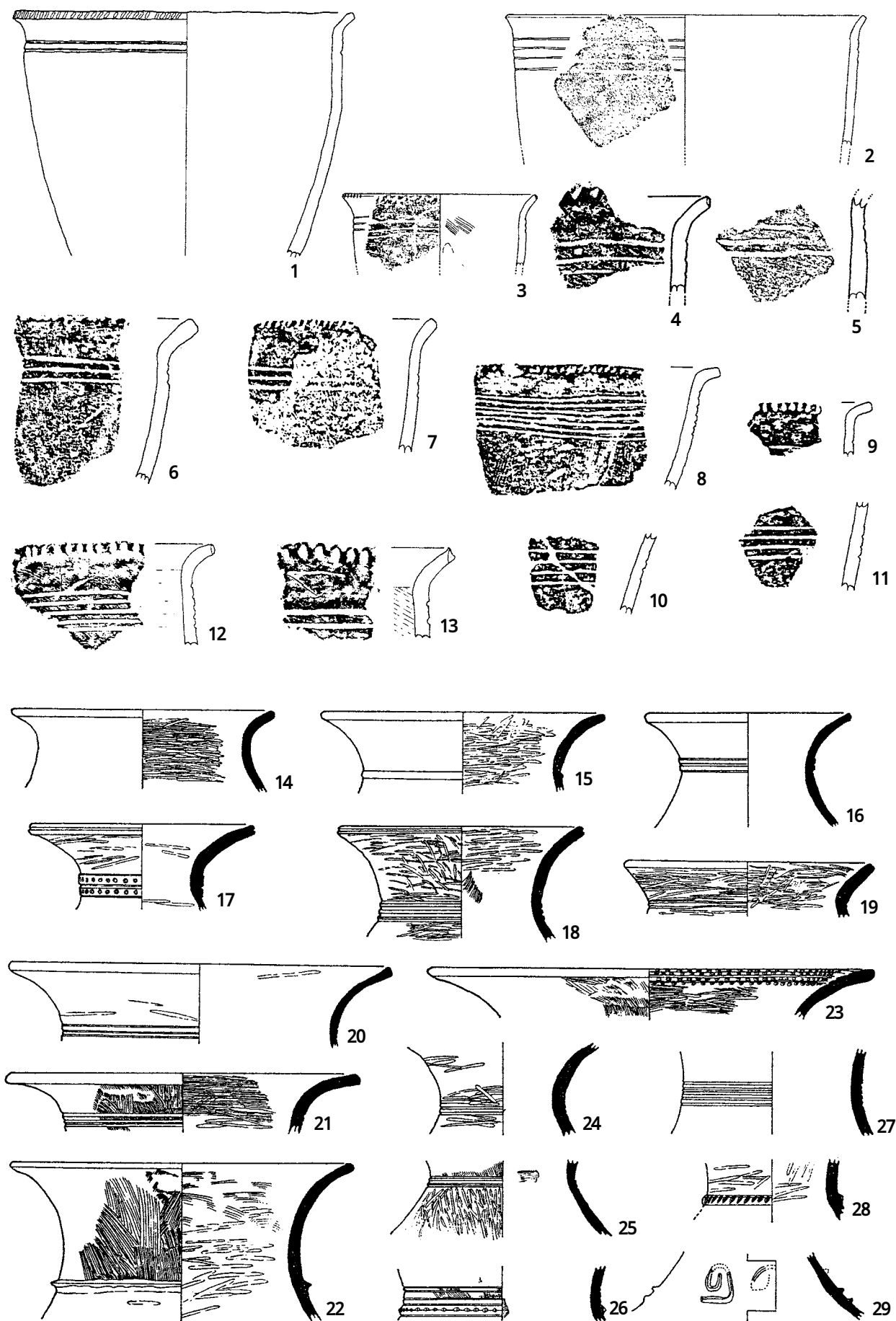
特徴4：木目沈線文を持つ土器は、遠賀川式土器では無く、遠賀川式土器には確認できない。

木目沈線文の工具は、ハケである。ハケによる文様は、刻みが 期前半に甕に確認され、壺の口縁部文様は 期前半に存在する。ハケによる櫛描文は、富山県では小松式（久々ほか1984）石川県では中期後半（久田1993）で確認された。よって、 期（後半）以降にハケによる施文（調整具と施文具の同一化）が主体になった結果、ハケによる刺突直線文（木目沈線文）が出現したものと思われるが、出現時期は凹線文が存在しており、凹線文を木目沈線で表現した可能性が高い。

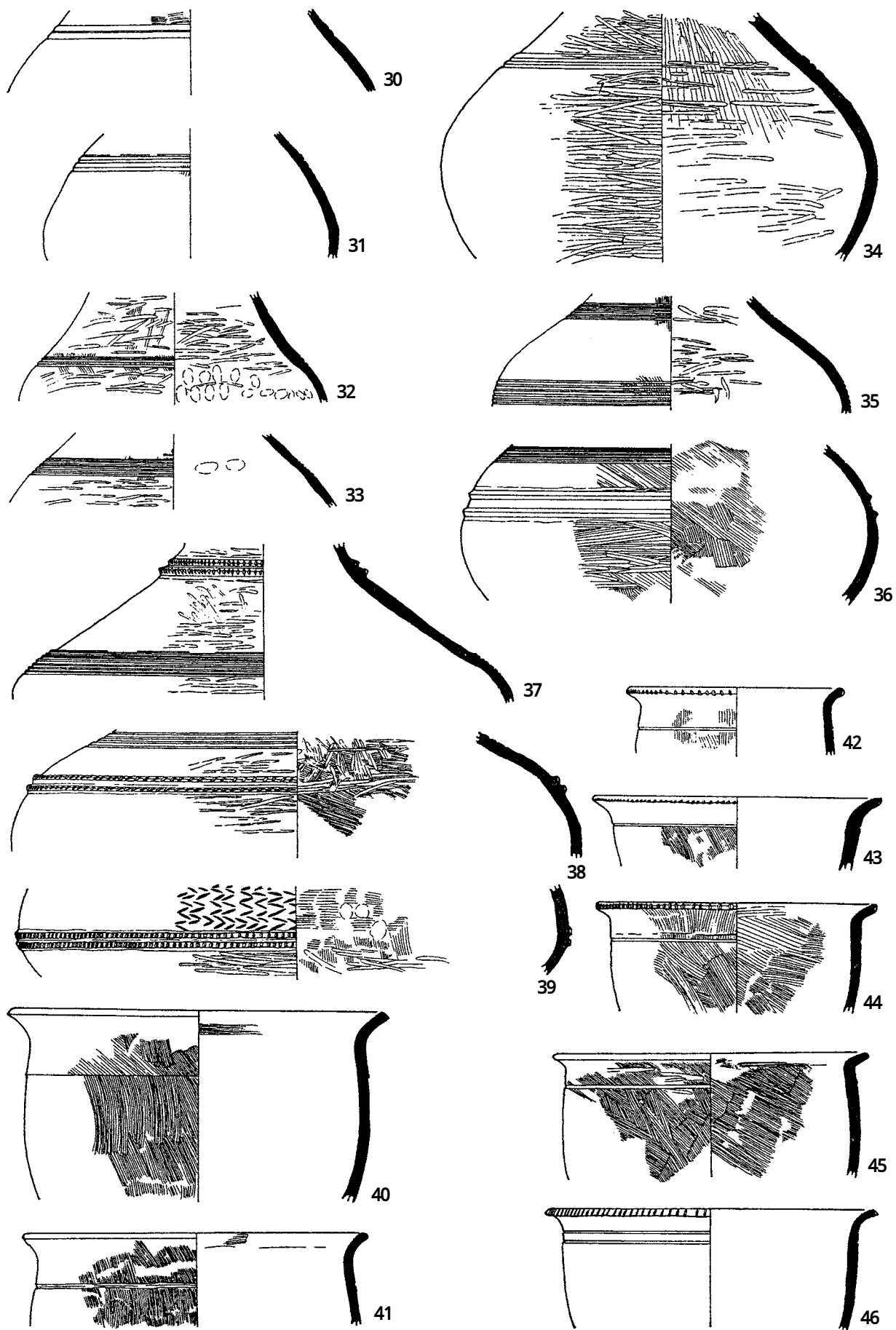
5．福井県内の遠賀川式土器

では、北陸地方における遠賀川式土器はどのような状況なのであろうか。出土例は21世紀になってからもあまり増えていないのが現状である。福井県若狭地方では、大飯郡大飯町大島宮留遺跡で甕5点（第2図1～5、3～5は同一個体）、吉見浜遺跡で甕4点（8～11）、小浜市阿納塩浜遺跡で甕2点（6・7）が出土（入江1986・入江ほか1986）した。小浜市丸山河床遺跡では壺・甕などの破片が約1200点出土（第2図14～第4図53、森川1992）し、三方郡三方町田名遺跡では甕2点（12・13、田辺ほか1988）、三方町海山五十八遺跡では壺1点（若狭歴史民俗資料館1999）、敦賀市吉河遺跡で壺1点（第4図55、中司ほか1986）が出土した。若狭地方では、数遺跡で甕のみの出土が確認されたが、調査面積の少なさに起因しているのであろう。写真によると、石英・長石類より流紋岩と思われる砂粒が目立つ（2・6・7・46・海山五十八遺跡）が、確認はしていない。丸山河床遺跡では壺・甕・鉢・蓋のセットが確認され、出土量や時期幅からも集落が存在したようである。列点文（17・23）から丹後、貝殻施文（39）から山陰～九州北東部の影響が想定（森川1992）されるが、比率は多くない。55は櫛描文による文様であり、第 様式とされるが、詳細な報告がなされていない。

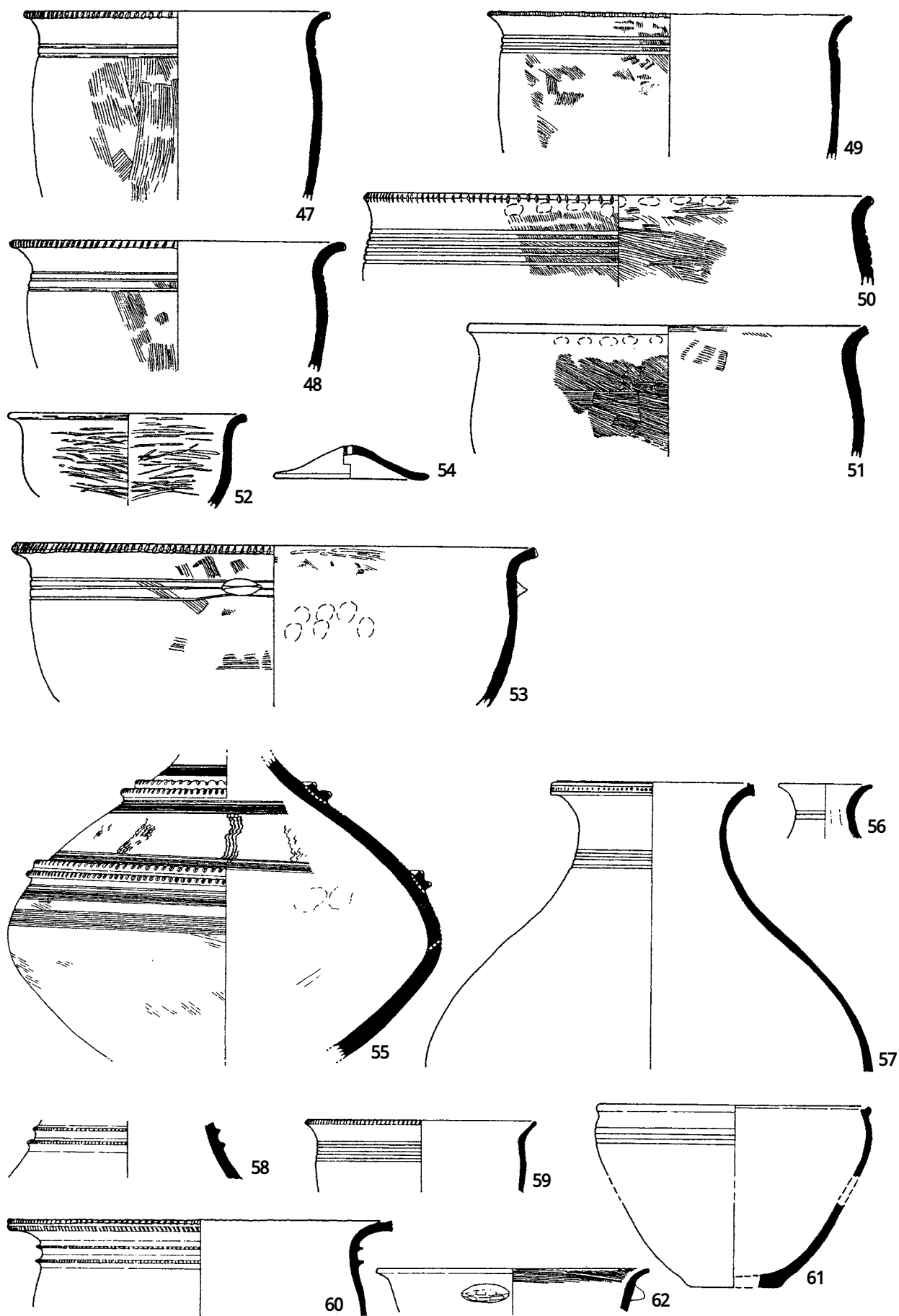
越前地方では、福井市糞置遺跡で、壺・甕・鉢など（第4図56～61、田辺ほか1986）と丹生郡清水町飯谷在田遺跡（古川2001）でも壺・甕のセットが確認されたことから、越前地方でも遠賀川式土器を使う集落が存在した可能性が高くなった。両遺跡とも、詳細な報告が望まれる。



第2図 遠賀川式土器集成 1



第3図 遠賀川式土器集成 2



第4図 遠賀川式土器集成 3

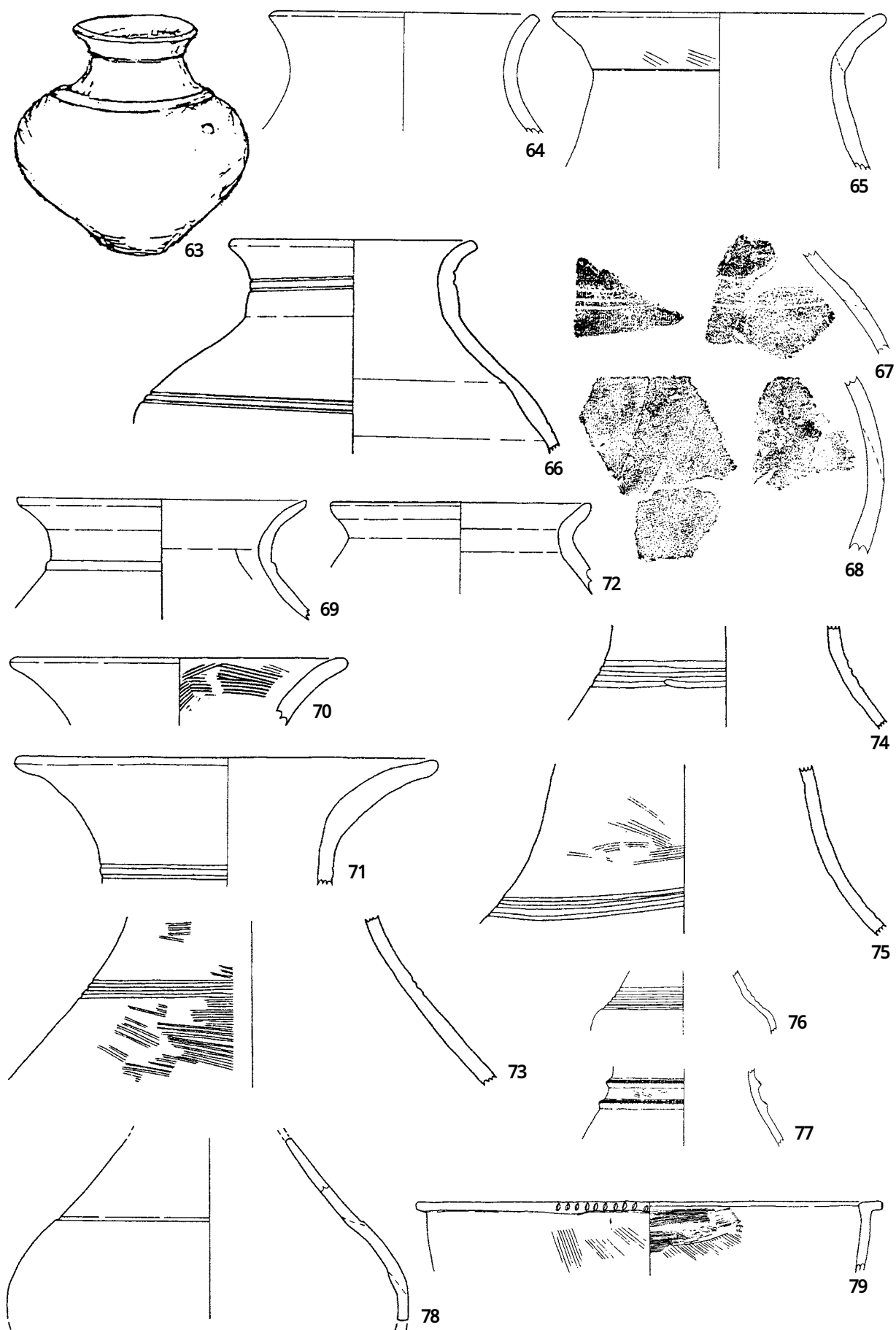
6．石川県内の遠賀川式土器

加賀地方では、小松市八日市地方遺跡で壺1点（第5図63、樫田1999）、能美郡寺井町牛島ウハシ遺跡で壺2点（64・65、井上1999）、石川郡鳥越村下吉谷遺跡で壺1点（66、橋本1981）が出土した。松任市八田中遺跡で壺3点（67・68他に底部、久田1988）、乾遺跡で数点（69～77、岡本2001）、石川郡野々市町栗田遺跡で壺2点（78他に底部、久田ほか1991）が出土した。金沢市南新保三枚田遺跡で壺1点（80、楠ほか1984）、戸水C遺跡で甕1点（79、戸潤ほか1986）、観法寺遺跡で壺1点（99年度県センター調査）が出土した。しかし、単独ないし少数出土であり、セットが確認できないことにより、搬入ないし模倣土器と思われる。

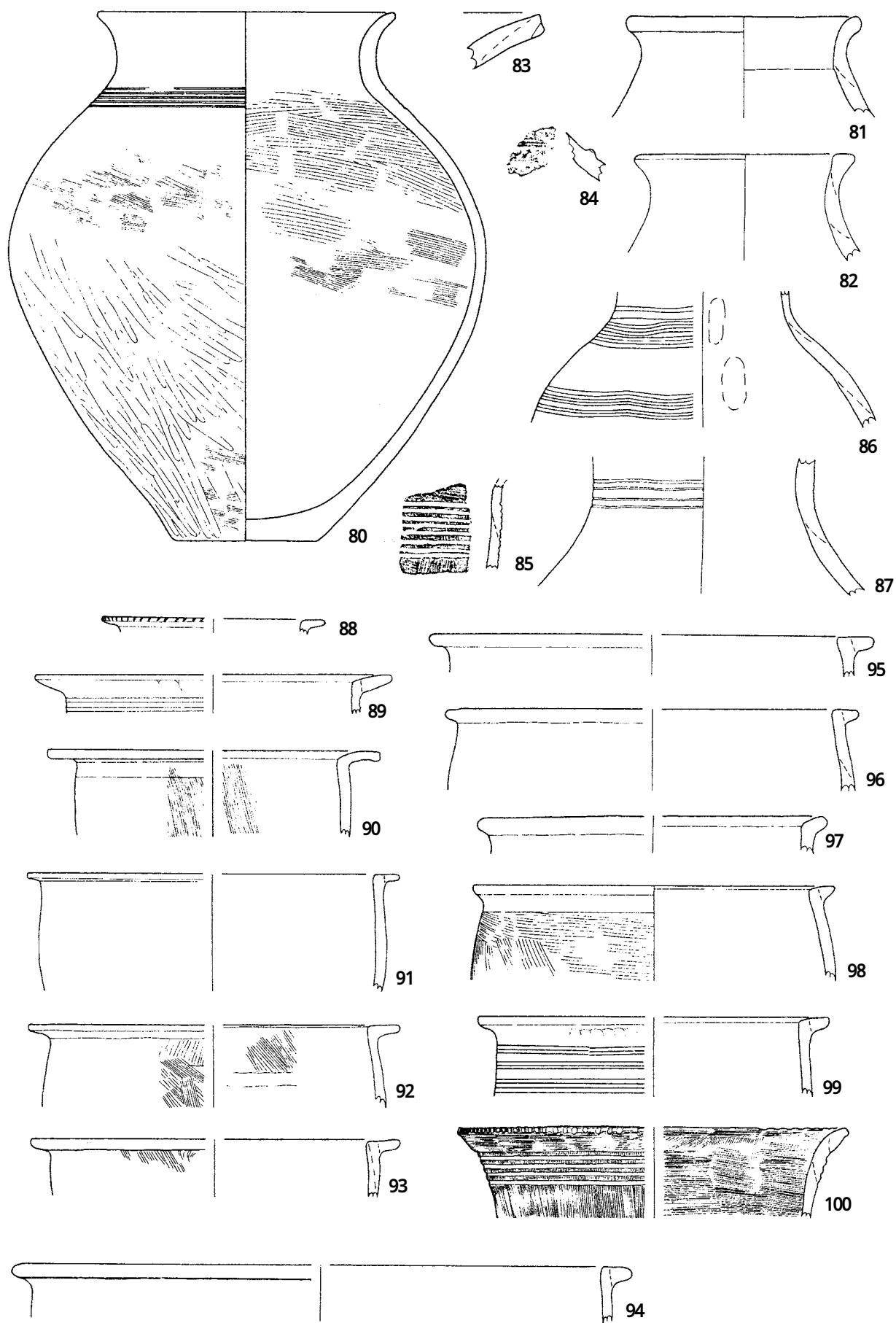
63は外傾接合であり、長石と石英を少量含むが、主体は流紋岩であり、黒色・灰色が主体を占める。64・65は河跡出土であり、縄文時代中期中葉から弥生時代後期後半の土器と出土した。67・68は同一個体と思われる、長石主体であり、石英（クリスタルとにぎり）を含む。角閃石を微量含む。乾遺跡A区下層から長竹式後半～柴山出村式（大洞A式後半～前期末）の土器とややまとまった量が出土した。69は石英（にぎり）が主体、クリスタルと長石と黒色・赤色流紋岩を含む。70も流紋岩が主体であった。71は石英と長石を少々含み、流紋岩が主体であり、黒色・赤色・茶色が主体である。69～71は外傾接合である。73の沈線は断面が丸い工具による1本引きである。内傾接合であり、貝殻条痕を持つので条痕系の壺である。沈線文を持つ壺（74～76）は接合方法を確認してから後日報告したい。77は貼付突帯を持つので新段階と思われる。78は1本沈線のみを文様に持ち、やや古相を呈する。胎土には、石英（にぎり）・長石類と流紋岩が半々を占める。79は逆L字口縁を持つ甕である。80は1mm以下の砂粒を若干含み、胴部上半はハケ調整が残るが、表面は風化し、表面に所々赤彩痕が残る。楠氏は前期であることを躊躇されたが、前期新段階（吉岡1991）とされた。胴部上半にハケ調整痕の上にミガキが認められないのは、ミガキ調整が存在しなかったのであろう。胴部上半に5条の沈線を持つが、頸部が短く外反するのも違和感を持つ。よって、80は中期後半ではなかろうか。金沢市観法寺遺跡の壺は、洗浄中に筆者が存在を確認し、赤色流紋岩を多量に含んでいた。

能登地方では、羽咋市吉崎次場遺跡N2土坑（81～85）とN区包含層（86）J・W区包含層（87～100）でややまとまって出土（福島ほか1987）した。N2号土坑は中期初頭の櫛描文土器と出土、一部（安1990）と全て（吉岡1991）を中期初頭とする案がある。83は壺の口縁部でヘラによる刻みを持つ。84は壺の貼付突帯であり、ハケによる刻みを持つ。85の沈線はヘラによる。他に鉢が存在する。81～85は外傾接合であり、櫛描文土器も全て外傾接合（的場・久田ほか1994）である。遠賀川式・櫛描文系は石英・長石を主体とし、一部に流紋岩を微量含む土器があるが、砂粒が大きい。条痕系も同じであるが、砂粒は小さく、一部に海綿骨針を持つ土器がある。また、条痕系は内傾接合であり、色調や器壁が薄いなどの点が異なる。

86以下の胎土も石英・長石を主体とする。100は他に少量の流紋岩と海綿骨針を多く含み、遺跡ないし周辺で製作されたものである。89は黒色流紋岩主体であり、搬入の可能性が高い。86は頸部径がもう少し広くなり、浅い4条の櫛描文を持つ。石英・長石主体であるが、黒色流紋岩を少し含む。87は半截竹管による直線文であり、95・99・100はクシによる。90・91・93の胴部はもっと張るようである。90は 期前半の西日本系甕であり、他に東部瀬戸内系甕の搬入が確認（宮下1998）された。95と99は同一個体であり、95にも4条の浅い櫛描文が存在する。95は石英・長石以外に花崗岩を微量、96は花崗岩を多く含む。88～99は、逆L字口縁であり、外側に粘土を貼り付けている。口縁部は、指で上下から押さえており、口縁上面はナデているが、丁寧ではない。胴部の接合は確認できるのは外傾接合であり、内傾接合はない。逆L字口縁の甕は、山陰・山陽地方の前期末～中期初頭に存在



第5図 遠賀川式土器集成 4



第6図 遠賀川式土器集成 5

(正岡ほか1992)し、この地方からの影響が考えられる。

7. 富山県内の遠賀川式土器

富山県内では、2遺跡で確認された。高岡市石塚遺跡の壺(第7図101)は、遠賀川系土器(上野1972)とされる。ヘラ描施文を基調とした6種類の文様を持ち、土器は厚く、粗い砂粒を含み、器面はヘラミガキが全面に施されるようである。イ溝内ピット(周溝を持つ建物、久田1992、 期末～期前半)と5m離れた1号溝から出土しており、遠賀川系土器ではないようであり、詳細な報告が望まれる。射水郡下村加茂遺跡では壺の破片が3点出土しており、2点(102・103、久々ほか1999)が報告された。前期古段階とされているが、細片であることや条痕文系土器も文様を持たないことから時期は特定できず、下がる可能性が高い。

8. 新潟県内の遠賀川式土器

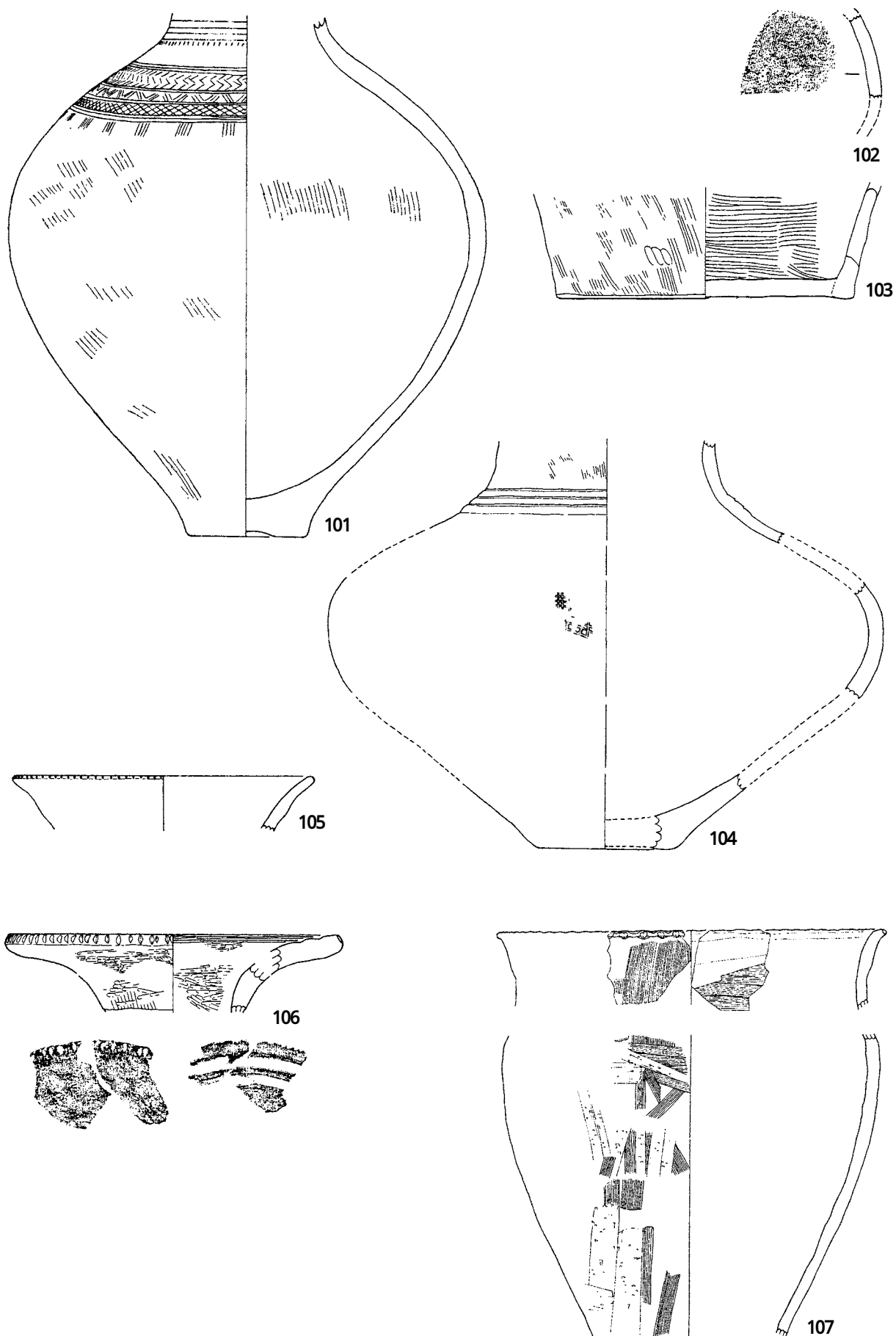
新潟県内では、上越市大塚遺跡で壺2点(104・105田中ほか1988)、中頸城郡中郷村和泉A遺跡で壺・甕1点(106・107荒川1999)が出土した。104は胎土から信州系(田中ほか1988)とされたが、胎土には石英(クリスタルと濁りの2種類)と黒色流紋岩が主体であり、長石は少量で花崗岩も少々入る。角閃石や赤色流紋岩も入る。105は花崗岩と黒色流紋岩が主体であり、白色流紋岩も入る。黒色が入ることは島根県の遠賀川式土器に近く(久田2001)、赤色は近江地方の遠賀川式土器に認められる。また長野県内の石英はクリスタルであり、濁りは確認されない。よって、信州系というよりは山陰系ないし近江系の可能性が高いと思われる。和泉A遺跡の106は花崗岩主体であり、金雲母も入っており、亜流遠賀川式土器(荒川ほか1999)とされた。107は甕と思われ、ハケ調整と思われた。石英がクリスタルと濁りのあるもの両者が確認され、金雲母と白濁石が認められた。胎土的には、両者とも東海地方西部と思われる。

9. 遠賀川式土器の胎土

遠賀川式土器は、胎土から長石・石英を主体とするグループ(A類)と流紋岩を主体とするグループ(B類)が存在し、後者は黒色が主体(a類)と黒・赤色が主体(b類)がある。流紋岩(チャートの可能性もあるが筆者の裸眼では識別不能)のBa類は島根県の遠賀川式土器に、Bb類は近江地方の遠賀川式壺と粟津湖底貝塚の北陸系土器に確認した。また、若狭地方の土器にも流紋岩(B類)が存在する可能性があるようである。胎土から見た遠賀川式土器の系譜は、A類の106・107は、東海地方西部からの搬入の可能性が高い。新潟県内では条痕文土器(樫王・水神平式)と共に長野県経由で搬入されたようである。羽咋市吉崎次場遺跡の土器は殆どA類であるが、搬入か模倣かは判断がつかない。しかし、逆L字口縁の甕が殆どであるので、山陽・山陰地方の影響が想定される。

黒色流紋岩のBa類は、63、78、105で確認された。黒・赤色流紋岩のBb類は、69～71、104、金沢市観法寺遺跡、長野県松本市エリ穴遺跡(未報告竹田学氏教示)で確認された。石川県内では、B類は小松市梯川流域で確認され、Bb類の赤色砂粒(鉄石英か)は羽咋市柴垣海岸以北の遺跡(羽咋市北部～富来町)でも確認されるが、両地域では遠賀川系集落の存在を考えるのは難しく、西日本に系譜を求めざるを得ない。Bb類の遠賀川式土器は、滋賀県内に存在し、また福井県若狭地方にもB類の遠賀川式土器が存在する可能性があり、この地域からの搬入の可能性を指摘しておく(第9図)。

北陸地方の突帯文深鉢は、福井県大野市佐開遺跡(第8図1・2、南1986)と大島田遺跡(3、宝珍ほか1991)、石川県加賀市横北遺跡(4～6、湯尻1977)と石川郡鶴来町白山町遺跡(7～10、西



第7図 遠賀川式土器集成 6

野ほか1985)と松任市長竹遺跡(11~21、中島1977)と野々市町御経塚遺跡(22~25、高堀ほか1983)と金沢市近岡遺跡(26・27、楠ほか1998)、富山県高岡市下老子笹川遺跡(29、富山県文化振興財団1999)と朝日町境A遺跡(28、酒井ほか1991)で確認された。22・26は東海地方西部の西之山式と思われる、2・27~29の2条刻目突帯文深鉢は船橋・長原式の影響と思われる。29の時期を酒井重洋氏は尖底から大洞C2式併行、家根祥多氏は船橋式、私は長原式とみている。10はく字口縁を持つので違う可能性が高い。また在地化した11~20や口唇部に刻みを持つものが多い。滋賀県内では、大津市滋賀里遺跡では滋賀里・式に北陸系土器が伴う(田辺編1973第3表)ことや、長竹式(後半)の浅鉢(服部遺跡)と柴山出村式壺(上寺地遺跡)の搬入(久田1998)が確認された。よって、晩期後半~弥生時代前期にかけて、北陸地方(新潟県も含む)・飛騨・信州地方からは浅鉢・壺類の精製土器を中心に一部深鉢が近畿地方に搬入され、この交流に乗って遠賀川式壺が北陸地方などに搬入されたものと思われる。

10. おわりに

本稿を纏めるにあたり、以下の方々の教示を得たが、旨く生かせなかったことをお詫びする。また特に、家根氏は今後教示を得ることが出来ず、心残りである。家根氏のご冥福をお祈りいたし、筆を終えることとする。敬称省略、赤澤徳明、石川日出志、石黒立人、伊庭 功、酒井重洋、佐藤由紀男、竹田 学、田村昌宏、福海貴子、林大智、家根祥多

使用図版縮尺

1 / 2 = 第1図14、第2図4・5

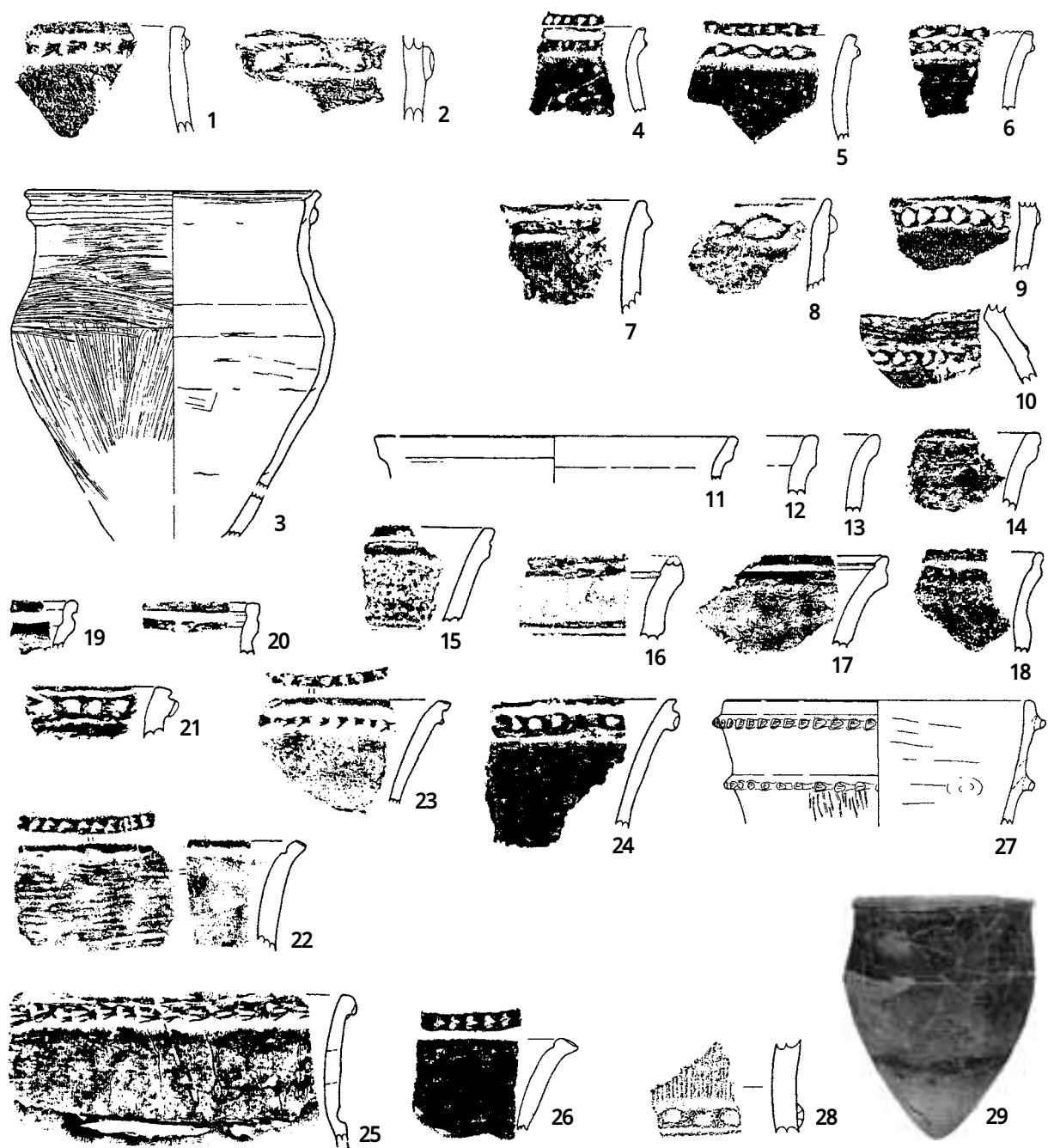
1 / 3 = 第1図1~3・6~12・18、第2図1・6~13、第5図64~68・78~100、第7図102~106、第8図1・2・7~10・12~28

1 / 4 = 第1図13・15・16・17、第2図2・3・14~55、第5図69~77、第7図101・107、第8図3~6・11

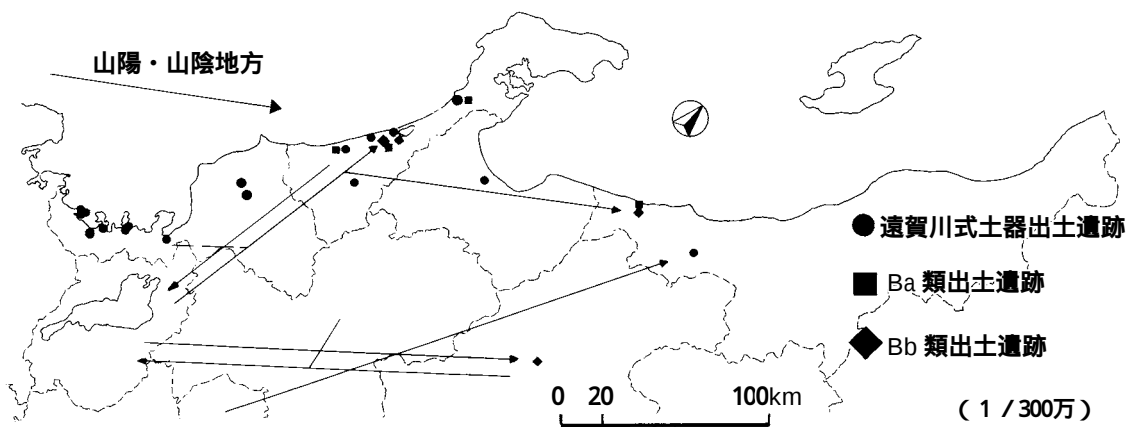
1 / 6 = 第1図4・5、第4図56~62

参考文献

- 荒川隆史ほか 1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会
井上誠一 1999 『牛島ウハシ遺跡』 石川県寺井町教育委員会
入江文敏ほか 1986 『大島浜福宮留遺跡 大島宮留遺跡』 若狭考古学研究会
入江文敏 1986 『宮留他遺跡』『福井県史』考古編 福井県
上野 章 1972 『弥生時代附、古式土師器』『富山県史』 富山県
岡本恭一 2001 『松任市乾遺跡発掘調査報告書—A・C区下層編』 (財)石川県埋蔵文化財センター
樫田 誠 1999 『弥生時代のムラー八日市地方遺跡』古代学協会講演会資料
久々忠義ほか 1984 『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編』 富山県上市町教育委員会
久々忠義ほか 1999 『下村加茂遺跡発掘調査報告』 富山県下村教育委員会
楠 正勝ほか 1984 『金沢市南新保三枚田遺跡』 金沢市教育委員会
楠 正勝ほか 1989 『西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会
楠 正勝ほか 1996 『西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会
楠 正勝ほか 1998 『金沢市近岡遺跡』金沢市教育委員会
坂上有紀ほか 2000 『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』 新潟県教育委員会
酒井重洋・狩野 睦ほか 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編』 上市町教育委員会



第8図 突帯文深鉢集成



第9図 遠賀川式土器出土遺跡分布図

- 酒井重洋ほか 1991 『北陸自動車道遺跡調査報告—境 A 遺跡土器編』 富山県教育委員会
- 佐原 真 1987 「みちのくの遠賀川」『東アジアの考古と歴史』中 同朋舎
- 高堀勝喜ほか 1983 『野々市町御経塚遺跡』 石川県野々市町教育委員会
- 田中 靖ほか 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書 原山遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会
- 田辺昭三編 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』 湖西線関係遺跡調査団
- 田辺昭三ほか 1986 「糞置遺跡」『福井県史』資料編13考古 福井県
- 田辺常博ほか 1988 『田名遺跡』 福井県三方町教育委員会
- 栃木英道ほか 1995 『谷内・杉谷遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター
- 戸潤幹夫ほか 1986 『金沢市戸水 C 遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 富山県文化振興財団 2000 『大規模発掘十年の出土品展』
- 中島俊一 1977 『松任市長竹遺跡発掘調査報告』 石川県教育委員会
- 中司照世ほか 1986 『吉河遺跡発掘調査概報』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 西野秀和ほか 1985 『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡()』 石川県立埋蔵文化財センター
- 橋本澄夫 1981 「鳥越村下吉谷遺跡出土の前期弥生土器」『石川考古学研究会々誌』第24号 石川考古学研究会
- 東日本埋蔵文化財研究会 1991 「富山県」『東日本における稲作の受容』 東日本埋蔵文化財研究会
- 久田正弘 1988 『八田中遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘ほか 1991 『粟田遺跡発掘調査報告書』 (社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 久田正弘 1992 「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」『石川県埋蔵文化財保存協会年報3』
(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 久田正弘 1993 「能登における弥生時代中期の一樣相(2)」『石川考古学研究会々誌』第36号 石川考古学研究会
- 久田正弘 1998 「北陸西部系土器の動き」『氷遺跡発掘調査資料図譜』 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
- 久田正弘 2001 「縄文晩期後半における条痕の系譜」『北越考古学』第12号 北越考古学会
- 宝珍伸一郎ほか 1991 『大島田遺跡』 勝山市教育委員会
- 福島正実ほか 1987 『吉崎・次場遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 古川 登 2001 「甌谷在田遺跡」『第16回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 正岡睦夫・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年』 木耳社
- 増山 仁 1992 『金沢市専光寺養魚場遺跡』 金沢市教育委員会
- 松浦郁乃ほか 1998 『金沢市二ツ屋遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 的場勝俊・久田正弘ほか 1994 『山王丸山遺跡』 石川県富来町教育委員会
- 松田睦夫ほか 2000 『富来城跡』 石川県富来町教育委員会
- 南 洋一郎 1986 「佐開遺跡」『福井県史』考古編 福井県
- 宮下栄仁 1998 『吉崎・次場遺跡第16次』 羽咋市教育委員会
- 森川昌和 1992 「米の文化」『小浜市史』通史編上巻 小浜市役所
- 吉岡康暢 1991 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・磁器 古代編』 六興出版
- 安 英樹 1990 「北陸における第 様式の弥生土器」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会
- 山本直人ほか 1987 『永町ガマノマガリ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 湯尻修平 1977 『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会
- 若狭歴史民俗資料館 1999 『若狭の古代遺跡』